

修学旅行の話

三年 齋藤 辰幸（平成三年度）

三年生になってすぐに修学旅行があったわけだが、いろいろな所を見て廻ったにもかかわらず、一番心に残っているのは、ホテルでのことだ。

みんななどいろいろなことをして遊んだ。そして、ジュースばかり飲んだので腹がいっぱいになってしまった。これは秘密の話だが、読者のみなさんにだけ、特別にお話ししよう。ジュースを買いに行くのはとても大変だった。というのも、ぼくたちはなぜかフロントの前を通って外へ出るのがいやだったからだ。それに、カギを預けて出なければいけないのもいやだった。そこで、ホテルの中を調査した結果、二階には駐車場へ出られる出口があったので、そこから三人ほどでかくれて買いに行った。外へ出ると、駐車場なので車がいっぱいあり、ホテルの壁づたいに走った。すると、監視員らしき人がいて、「ヤバイ！」と思い、こっそりと見つからないように行ったつもりだったが、全力疾走で走りぬけた後でふり返ると、その人はずっと見ていた。しかしかまわず走って、ジュースを十五本ほど買い、またまた全力疾走で帰った。監視員に見つかることがわかったので、今度はフロントか

ら入ることにした。でも、フロントから出てもないのに、ジュースをどっさり持っていたら余計にあやしまれるので、しばらく外で様子をうかがった。フロントの係がスキを見せた瞬間に、ササツとエレベーターまで行き、乗った。スパイのような気分だった。あとで考えるとバカくさかった。

もう一つ話がある。

いつも夜になると、一つの部屋に集まって遊んだが、その夜はぼくとH君の部屋にみんな集まってきた。その日は班行動の日で一日中歩き回ったので、疲れていた上に、みんな足がくさかった。そのにおいは異常におつていたので、誰かの提案で、ババぬきをして負けた者が、みんなにそのおいをかがされる、という恐ろしいルールにまで発展してしまった。

さあ、これは大変なことになった。みんな目の色を変えてトランプの札に集中した。そのころにはもう、部屋の中は、足のおいが充滿していた。

そして数分後。その恐ろしいルールのえじきとなったのは、生徒会長のM君であった。M君は数分間暴れ回ったが、ついに取り押さえられた。そして、かがされ、失神した。

これから修学旅行に行く人は、このようなスリル満点のゲームをするのもいいだろう。

しかし、そのえじきとなるのは君かもしれないので気をつけよう。

このゲームが終わり、みんなが帰った後、我が部屋はすくにおつていたので、ぼくは換気しようとした。窓を開くと、五階なので、風がピューピュー入ってきた。すると、急に窓ガタガタツとしてはずれてしまった。重かったので高層ビルの五階から窓を落とした。心臓が一瞬止まった。H君の力を借りて、やつとはめたが怖かった。窓は、はまったが、換気はできなくなり、その夜は一晚中くさくて眠れなかった。

まだまだおもしろい話は三つほどあるが、今回はこのくらいにしておこう。どうしても聞きたくて夜も眠れない、という人は聞きに来てもムダなので、聞きには来ないで下さい。では、さようなら。